

養護教諭養成課程におけるシミュレーション教育の導入

—アレルギー対応の実践—

津田聡子^{*、1)}、成松美枝²⁾、長峰伸治¹⁾)

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾佐賀大学

1. 研究背景

わが国のアレルギー疾患の罹患率は増加し、2013年度文部科学省の調査では、全国の小中学校における食物アレルギーの有病率は4.5%、常時アドレナリン自己注射薬を持っている児童生徒は0.3%と報告されている。養護教諭を養成する機関においては、アナフィラキシーショック場面での迅速かつ適切な判断力と対応力の育成は重要である。一方で、シミュレーション教育の報告はほとんど見当たらず、養護教諭を目指す学生は救急処置に対して不安を持っていることが報告されている。

2. 目的

養護教諭を養成するA大学で実施したアナフィラキシーショック対応のシミュレーション教育の学習効果を検証し、今後の課題を明らかにする。

3. 方法

養護教諭教職課程履修中の学生8名を対象に、学校現場におけるアナフィラキシーショック対応のシミュレーション教育を実施した。シミュレーション教育前後に自記式質問紙を用い学生自身の理解度や自信度、実施後の感想の自由記述等を調査した。理解度や自信度については、アレルギー、アナフィラキシー、エピペンについて等の7項目とし、10段階の自己評価とした。事前調査は事前学習の前に実施し、事後調査はシミュレーション教育全ての項目終了後に実施した。分析はSPSS windows 24Ver.を使用し、調査項目の平均点を算出した。また、前後比較にはWilcoxonの符号付順位検定を用いて算出した。倫理的配慮として、本学研究倫理委員会の承認後、学生に研究について説明、授業時間外に学生の意思による質問紙調査の回収を持って同意とした。

4. 結果

受講前後の知識や自信度は、全項目において受講後が有意に高くなり ($p < 0.05$)、特にエピペンの手技についての自信度は、受講前 2.1 ± 1.8 点から受講後 8.0 ± 1.6 点と最も高くなっていった ($p = 0.01$)。自由回答では、「思った以上に緊張した」という回答がみられた。

5. 考察

事前学習で学校管理下をイメージさせ、シミュレーション教育実施時には、教室や工程の背景を3面スクリーンで切り替え、学童(人形)の急変から救急救命士(模擬)に対する報告まで、忠実度の高い環境で実施されたことで、アレルギーやエピペンについての知識はもとより、学校管理下における緊急時の対応をイメージ化できたことが自信にもつながったと考えられる。一方で、「緊張した」という感想もあり、実施後の感情表出を促すファシリテーション等、心理的負担への対応や環境整備の課題が挙げられた。

6. 結論

学校現場におけるアナフィラキシーショック等救急場面を想定したシミュレーション教育は学生の知識や自信度を高めるために有効であり、養護教諭養成に積極的に導入していくことの重要性が示唆された。